
終わりのないうた

澄空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おわりのないうた

【Nコード】

N0267B

【作者名】

澄空

【あらすじ】

リイル暦、917年。ある一つの街が、消滅^{きえ}た。リユクールの都。それは、ある金髪少女の仕業だった。哀しい瞳を持つ、少女。それを目撃してしまったキースは、呪を受け入れてまで都を消滅^{けし}た彼女を放っておけず、一緒に旅をすることになる。「見たんでしょ……？消滅^{けし}たのよ、リユクールを……」「けし……た？君が……？」「何故^{なぜ}つて……。こんな、ろくでもない奴等の溜まり場なんて、消滅^{きえ}てしまってもいいからよ」（本文より）

序章：旅のはじまり

（前書き）

序章は、あらすじのようなものしか書かれていません。
でもでも！ 読んでくださると嬉しいです。

また序章には、初めから出てくるような登場人物の説明などをのっけておきました。

序章：旅のはじまり

おわらないうたを、うたおう。

いま、ここに……。

永遠が、始まる……。

悪魔に魂を売ってしまった。けど、心は残ってる。

悪魔に魂を掴まれてる。けど、心は自由。

悪魔に魂を売ってまで、あたしが欲しかったのは、力。

あいつらに復讐する為の、力。

だから、それなりのリスクが必要。

あたしは、それを覚悟して、魂を売った。

そう、あの時、売った瞬間から、永遠に時空を歩む呪いを背負った。

To be continued...

これからこのお話を読むにあたっての、必要な知識
<重要な登場人物>

ミューシャ・エレ・キリー・・・リユクールの都を消滅した

張本人。

無限の時を歩む舞姫。

キース・グレイル

・・・

アマタワ城警備兵。

リユクー

ル消滅の目撃者。

リユーシャ・エレ・キリー

・・・

ミューシャの姉。

妹に、都

ごと消滅される。

・・・この後もまだまだ

出てくる予定です。

<あらすじ>

リイル暦、917年

。ある一つの街が、消滅した。

リユ

クールの都。それは、ある金髪少女の仕業だった。哀しい瞳を持つ、少女。それを目撃してしまったキースは、

呪を受け入れてまで都を消滅けした彼女を放っておけず、一緒に旅をすることになる。

一昔前に起こった、ミール・ストーンの世界を救う出来事。あの出来事からかなりの年月が流れた後のお話。

小説<ミール・ストーン>を読んでからこの作品を読んで頂けると、この二作の世界観がより理解しやすいと思います。

序章：旅のはじまり (後書き)

始めました、澄空の小説第二作ッ!!
まだまだ未熟な小説ですが、よろしくお願ひします。
楽しく読んでいただけると嬉しいです。

第一話・そして、君に出逢った。

(前書き)

荒野に佇む少女・・・。

第一話：そして、君に出逢った。

リイル暦、917年。ある国のある都市が、一つ消滅^{きえ}た。
サリナ国、リユクルの都市。文字通り、消滅^{きえ}た。
地図に載っている場所、現地地上には、ぼつかりと穴が空いたように、綺麗さっぱり、あるものを除いて、何も無い。

すでに、あつけらかんとなってしまうたリユクルに、一人の間が立っていた。見た感じ、15・6の少女。金色の長い髪を風に靡^{なび}かせている、細い軀。真っ白のワンピースを着ていて、その何もない荒野では、とても目立った。

「君は・・・？」

彼女に近づいてみて、ふいに尋ねてしまった。リユクルより100mほど離れていた俺は、突如起こった都消滅から免れていた。

何もなくなつた場所に、一人ぼつんと突っ立っているのだから、どうなつたのか訊きたくなるのも仕方ないと自分で思う。

声をかけられた少女は、ゆっくりと俺の方を振り返った。蒼い、哀しげな瞳を、俺に向けた。涙ののっていないその哀しげな瞳に、俺は釘付けになつた。

「リユクルの、住人・・・？」

彼女は、俺が質問したのにも関わらず、逆に訊いてきた。でも、俺はむっとしなかつた。瞳に心を奪われてしまって、同情してしまうほどだ。

俺が暫くぼーっとして答えを出さないと、彼女は前を向き、ここから去ろうとしていた。俺ははっと我に返り、走って彼女を止めた。

「ま、待て!!!・・・君は、いつたい・・・？」

彼女の右腕を掴んで、歩みを止めた。彼女はその細い軀を、もう一度俺の方に正面がくるよう、くるりと回転させた。そして、もう一度俺に同じことを訊いた。

「貴方は、リユクルの住人・・・？」

俺は迷わず首を横に振った。そして蒼い瞳を見つめ直した。・・・未だ、哀しそうだ・・・。

「違う。アムタワ国から来た、ただの旅人さ。・・・リユクルに用があつて来たんだけど・・・。」

「そう、残念ね・・・。 たった今・・・。」

彼女は無表情で喋った。でも眼はそのまま。哀しいのを、必死に堪えているかのようにだった。俺は、言葉の続きが気になった。

「たった今・・・何があつた!? 周りが、急に光つて・・・。」

そう、あの瞬間、辺り一面が輝いた。すぐ100m先に都が見えて、俺は、無事に着いた、と心を撫で下ろしたときだった。辺りが急に光り輝いて、腕で眼を塞いで光を遮ったんだ。次に腕を下ろして、眼を開いたときには、ついさつき一秒前まではあつた都が消滅して、この少女が一人ここに立っていた。

そして、今に至る。

「見たんでしょ・・・？ 消滅たのよ、リユクルを・・・。」

「けし・・・た？ 君が・・・？」

「ええ」

「なんで・・・？ 住人の、都の皆は・・・？」

俺は落ち着きを取り戻せなかつた。動揺を隠せなかつた。確かに、この眼で見た。都が消滅たのを。でも、本当に起こつたと云われて、頭の中が混乱する。彼女が、掴んでいる俺の手にそつと触れ、そこに視線を落とした。

「都と一緒に消滅たわ」

「なぜ・・・？ なぜそんなことをつ！？」

ついに俺は怒鳴ってしまった。女の子一人を相手に。さらに怒鳴つたとき、触れている彼女の手を振り払って、距離を置いてしまった。

無意識に、彼女を睨みつける。

「何故つて……。こんな、ろくでもない奴等の溜まり場なんて、消滅してしまってもいいからよ」

「そんなこと云うな！　この人たちは……！　リューシャは……！！」

俺の苦し紛れに吐いた言葉に、彼女はぴくりと軀をふるわせた。俺はそのことに気づいていたが、それを訊くほど心にゆとりがなかった。でも、すぐに分かった。

「そう……。貴方、姉さんの知り合いなのね……。ごめんなさい……」

彼女は俺と会って初めて、素直な言葉を出した。俯いてしまったが、すぐに顔を上げ、くるりときびすを返し、歩き出した。

「君は……！？　リューシャの、妹なのか!？」

「そんな、長い名前じゃない」

一言云つて、彼女は東の方角へ歩いて行った。俺は、脱力してその場に座り込んでしまった。そのまま、俺は彼女の小さい背中を見送った。

第二話：絶望……。そして、走る。

（前書き）

更新遅くなりました。
リユクール消滅後、彼は……。

第二話：絶望……。そして、走る。

どれくらい経っただろうか……。俺は、呆然とその場に座り込んでいた。彼女 リューシャの妹の背中が見えなくなってからもずっと。何も考えられなくて、気づいたときには夕刻だった。空が紅く染まりあがる。

「リューシャ……」

ふいに漏れた言葉には、大切な人の名が入っていた。

リューシャ 俺の、本当に本当に、大切な人だった。

幼少時代からの知り合いで、親同士の仲が良かった。でも……リューシャに妹がいるなんて知らなかった。

長い距離を経た、お互い遠い場所に住んでいたが、何かあると、その長い長い道のりを旅して地を訪れる。これを俺たちは繰り返していた。今回だって……。仕事……。俺はアムタワ国の城警備を担っている。だから、余計俺は彼女に逢いに行けない。彼女が俺を訪れることの方が多いくらいだ。今回俺がリューシャを訪れたのは、本当に久しぶりで、胸を躍らせていた。なのに、こんなことになるなんて……。未だ信じる事が出来ない。本当に、消滅えたのか……。取り戻せないのか……。？ “ろくでもない” って……。？ あの妹は、何を考えている……。？ それ以前に、リューシャに妹がいるなんて知らなかった……。俺はばつと立ち上がり、ズボンに付いた土を払って、リューシャの妹が向かった方角へ走り出した。

辺りが真っ暗で、何も見えなくなるまで、俺は走った。ぴたりと足を止め、その場に四つん這いになるようにして倒れこんだ。肩で息して、苦しかった。それもそうだ。ずっとここまで走ってきたの

だから。何キロ走っただろうか。それくらい全速力で走ったのに、リューシャの妹は見つからなかった。何故か、彼女は何かを隠している気がした。そして、どことなく不安が、俺の胸を締め付けた。あの哀しい瞳が、そう物語っていたようだったのだ……。

第二話：絶望……。そして、走る。

（後書き）

まだまだ始まったばかりですが。

小説＜ミール・ストーン＞と同じく

＜おわりのないつた＞も宜しく願います。

第三話：それぞれの想い、交わることなく。

あの人は誰だったのかしら……。

歩いている最中、ずっと考えていた。あの人は、姉・リユーシャの名を出した。……ということは、リユーシャの知り合い。でも、あたしは知らない。理由は、姉もあたしを軽蔑していたから。……リユクールに住人も、同じ。皆、あたしを……。

考えごとをしながら歩いていると、辺りは真っ暗、夜になってしまった。あたしは、静かに深く息を吐いて、空を見上げた。無数の星々。この星たちも、何万年、何億年と永遠を歩んでいるのだろう。これからも……。そして、今日からあたしも……。

朝。俺は昨夜倒れこんで、そのまま眠りに就いてしまった。

少しの間思考が止まっていたが、すぐに動き出す。

「リユーシャ……！」

声と共に、軀を勢いよく起こす。そうだ、消滅なんだ……。未だ信じる事が出来ない。けれど、真実。都の最期の閃光を、この眼で見た。痛いくらいに眩しかった。

まだまだ謎だらけのこの都消滅。だから俺は、あの時都に居たりユーシャの妹らしき人物を問いただしてみようと思った。

俺は立ち上がった。衣服を整えて、ゆっくり歩き出した。

あれからずっと歩き続けて行き着いたのは、サリナ国のサリナ城下町。彼女を追って、真っ直ぐ同じ方向に来た。この街に彼女が居る確率が高いはずだ。気を引き締めて、俺は城下町へ入った。

町は、貧相な雰囲気をかもし出していた。しかし、住人は温かな

笑顔を見せている。俺は、ちょうど目の合った女性に訊いてみた。

「すまないが……。ここに、旅をしているような……。女の子来なかつたか？」

女性は首を傾げる。

「来なかつた……。わねえ。この町に入ってきたら、今の貴方みたいにすぐに分かるもの」

少し太ったその女性は、俺の質問に答えてから、表情を急変させた。「それより、今日はこの町で祭があるのよ！ 顔を出していったらどう？」

「えっ。でも余所者の俺なんか……。」

「ミール・ストーンの使い手を奉る日よ！ 余所者でも大丈夫！ 夜にはお城の前で舞があるわ。毎年同じ娘^こだけど、綺麗なのよ。気が向いたら来なさいよ！」

忙しげに、言いたいことだけ言っただけ言っただけその女性は町の中に姿を消した。俺は無意識に溜め息をついた。これからどうしようかと、考えてみたがまず、体がだるい。悲鳴を上げている。

結局、ここで宿を一晚とることにした。

宿に着いて部屋を充て^あてられ、俺はすぐにベッドに倒れこんだ。そのまま、数分と経たないうちに眠ってしまった。

第四話……居た。舞っている。哀しそつた。

(前書き)

ついに。見つけます。

第四話：・・・居た。舞っている。哀しそうに。

あれからどのくらい眠っていただろうか。部屋のドアをノックする音が聞こえるまで、俺は眠り続けていた。

「・・・はい」

俺は目を擦りながら、返事をした。かちやりとドアが開き、先程宿をとったとき話した、宿の主人が入ってきた。

「よう。お疲れのところ悪いね。今から夜の祭が始まるもんで、ここ誰も居なくなるから閉めるんだけど」

「ああ。分かった。出よう」

「舞が終わったらまた開けるから。金はとらねえよ。帰ってきたかしたら帰って来い」

「ああ」

俺は、鞆を持って宿を出た。本音を言うと、別に祭なんか興味ない俺の国でも、多分今日同じような祭が行われているだろう。それどころか、今日は世界中で、ミール・ストーンの使い手を奉る祭があるだろう。ミール・ストーンは5つあり、使い手もそれぞれの国に1人ずつ居たのだから。この国からは・・・『テューサ』だったかな。この少女から始まったと云われている、世界を救う旅。

今は、色々な乗り物が発明されて、他国への移動が便利になったが、あの頃の世界にそんなものはなかったはずだ。

俺は色々と祭について考え事をしながら歩いていた。気づくと、俺の歩いている道には、人一人としていない。俺はそのまま真っ直ぐ歩いた。城門前の、広い場所に出た。

城の前は、普段はこれほど派手ではないだろうと思えるくらい、飾り付けされていた。あちこちの城壁から民家の屋根まで、綺麗な色のテープが張り巡らされ、また、空を見上げるとテープだけでないカラフルな風船も括りつけられている。夜だというのに、多彩な

電飾で昼の日光に負けないくらい、辺りは明るかった。

そして、そこにはたくさんの人ばかりがあった。きつと皆ここに集まっているから、町の道路には誰も居ないのだろう。

背伸びをして、人々が眼を見開いてのめり込んでいる舞を見てみた。

ああ、綺麗だ。

興味なかったはずの祭に、舞に俺は見惚れていた。銀のアクセサリーを身につけ、真っ白なワンピースを纏った少女。金色の長い髪を風に靡かせ、美しい舞を舞っている。

彼女から眼を離せなかった。彼女にはそんなチカラがあった。だからこそ、こんなにもの人々をここに集まらせている。しかし、どこか哀しげなところがある。美しいけど、哀しい。これは……。

やっとこちらに彼女の顔が向けられた。四方八方を人々に囲まれているので、色々な場所を見つめて舞っている。笑ってはいなかった、その顔。しかし美しい舞。俺は、背筋がぞくりと波打った。

あの娘は……！！

リユーシャの妹。あの娘が、舞っている！ 城下町に入ったときに訊いた女性が、気に留めることがないわけだ。この町の、住人だったんだ……。しかし、それでは矛盾が生ずる。彼女は、リユクルの住人じゃなかったのか……？

考えていると、彼女の舞は終わった。お辞儀をして、その場を離れる。何か、急いでいるようだった。俺は、彼女を追った。ここで彼女を見失うわけにはいかない。走った。人込みをかき分けて、走った。

彼女が歩いていった方へ、走り続けた。通り過ぎる人々は、何事かと俺を見てくる。ぶつかられて迷惑だ、という視線も、不思議そうに見つめてくる視線も、とにかく気にせずに、俺は走った。

人込みから抜け出し、町の道路まで来た。しかし、彼女を見つけられることは出来なかった。見失った。諦めずに裏道なども捜したが、居なかった。肩で息をして、苦しかった。

「・・・あんだ。大丈夫かい？ どうしたんだい？」

後ろから声をかけられ、ぎくりとした。振り返ると、先刻会話をした、あの太った女性が居た。

「あ・・・。・・・さっきの、舞を舞っていた娘はどこに行ったか知らないか!？」

無意識に声が大きくなる。俺の目の前に居る女性はびっくりして、少しの間口を噤んだ。俺は答えを待った。

「・・・ミュ、ミュージアちゃんのことかい？」

一人の名を出す。ミュージアというのか。確かに、リユーシャと名が似ている。

「ミュージアは、今どこに？」

「着替えて・・・町を出たんじゃないかしら。何か忙しそうな感じだったから・・・。」

「そうか・・・。有難う」

俺は礼を云って、その場を後にした。既に息は整っている・・・走るか?・・・走ろう。俺は軽く、一つ溜め息をつくくと、駆け出した。

まず、町を出るまでに、ミュージアは見なかった。周囲に眼を配りながら走る。

町の出入り口まで来た。膝に手をつけて、腰を曲げる。今日はたくさん走る・・・。疲労が溜まって、すぐに息が上がる。腰を曲げて膝に手をつきながらも、顔は上げて、辺りを見回す。

ポケットから時計を取り出した。銀色の鎖がついた、銀色の時計。俺の掌にすっぽりと収まる大きさの、時計。・・・誕生プレゼントだといって、リユーシャから貰ったものだ。

時刻を見ると、もう日が変わっていた。もうすぐ陽が昇る。俺は、身近にあった町の壁に背を預け、ずるずると座り込んだ。眠らず走り続けた所為か、すぐに眠りに落ちてしまった。

第五話：やっと、見つけた。のに……。

しかし、すぐに目が覚めた。昇ってきた太陽の光が、目蓋を通して眩しく感じた。がばつと身を起こして、きよるきよると辺りを見回した。周りには誰も居なかった。おおよそ、昨日の祭の片づけを、町の者総出で行っているのだろう。俺は、ミューシャを捜さなくては。

立ち上がり、もう一度ミューシャの手がかりを訊いてみよう、舞のあった場所へ行ってみた。そこは、やはりたくさんの人だから、色々な人が行き来している。城の警備兵から、子ども、老人まで。

大人が屋根へ上り、飾りを取って子どもに渡している。みんな笑顔で、素敵な風景だった。しかし、俺は今そんなことで和んでいる場合ではない。こんな所でミューシャは捜し出せないと直感した。・がしかし。

「じゃ、気をつけてね」

「はい。それでは」

一人の金髪女性が、町民に挨拶をしてその場を後にするところに出くわした。俺の横を、さらりと長い金髪が風で流れた。その女とすれ違う。俺はふいに振り返り、歩く、長い髪を持ち主の後ろ姿に、見とれてしまった。

どこかで見たことがあるような……。

ふと思いついた。リユケールの都の、あの娘だ。ミューシャ!! 頭よりも速く、軀が反応した。歩き去っていく彼女の右腕を、掴んだ。彼女の足を止め、彼女が急な出来事に驚きを隠せず、ばつと勢いよく振り向いた。

「あつ、貴方は……!!」

「やっと・・・見つけた・・・!!」

俺は苦笑うと、彼女は何か言いたげな顔をしたが、すぐに俺の手を振り解いて町の方角へ逃げた。

「おい!!」

すぐさま彼女を追う。俺は町に入ったところで、すぐに彼女に追いつき、もう一度腕を掴んだ。

「なんで、逃げるんだ。ミューシャ」

名を呼ばれ、ぴくりと反応を示したが、顔を俺の方へ見せなかった。逃げられないよう、少し掴んでいる腕に力を入れる。

「ミューシャ」

「その名を呼ばないで」

もう一度名を呼んだとき、彼女は声を出した。何故、名を呼んではいけないのだろう。今まで溜まっていた疑問も含めて、彼女に色々訊きたくなる。少しの間沈黙が続く。それを通りかかる人が不思議そうに見ていく。

俺は視線が気になり、ミューシャの軀を肩に担ぎ上げた。見た目通り、軽かった。軽くて、細くて、しっかりと抱えていないと落ちそうな感じだ。

「きゃ・・・」

思わず、というようなミューシャの声が漏れる。肩に乗せられたミューシャは、じたばたと抵抗した。俺の背中を拳で叩いてくる。・・・それほど痛くもないが。

「は、放して! いや!!」

「場所を変えるだけだから」

俺は一言言って、もう一度走った。町の外に出て、彼女をゆっくり降ろした。走っている間は、諦めたのかミューシャは抵抗もせずだった。地に足をゆっくりつけた彼女は、俺から顔を背ける。俺は少し脅して釘を刺した。

「逃げんなよ」

何の反応もしなかったが、ミューシャは口を開いた。

「・・・あたしに、何の用？」

俺の顔も見ずに、質問をぶつける。

「訊きたいことが山ほど・・・」

俺の言葉が終わる前に、彼女の軀がふらりと揺らいだ。何が起こったのか認知できぬ間に、ミュージシャの頭が、詳しく言えば額が、俺の胸にぶつかった。瞬間的に、俺は両腕を彼女の軀を支える形に持つていく。

「ミュージシャ!？」

彼女は気を失った。

第六話：拒絶。だけどそれは、届かず……。

疲れが溜まっていたのか。宿のベッドで休ませてやりたかったが、祭の片付けで、町の者は忙しい。宿の主人もいるかどうかわからない。彼女には悪いが、町から出たところの無造作に生えている巨木の元まで抱き上げて連れて行った。そこへ寝かす。頭の下には、俺の鞆を入れて枕代わりにしてやった。軀には、Ｔシャツの上から羽織っていた俺の服をかけてやった。

……暫く起きそうにないな……。

木の幹に凭もたれて、彼女が目を覚ますのを待った。

『ミューシャ！？』

……その名前で呼ばないでって言ったのに……。あたしは、その名を捨てたの……。

この人……。誰なのかしら……。何故……。あたしの名前を知っているの……？

まだ……。貴方のこと……。何も知らな……。

……。あたし……。疲れちゃっ……。た……。よ……。

眠い。俺だつて、ミューシャを捜していて昨日は全然寝ていない。でも、また逃げられるのも嫌だしな。さて、どうしたものか……。俺の隣で横たわり眠っている少女は、影にいたい何を隠しているのだろうか。……。何か、とてつもないことを隠している気がする。確かに俺は、訊きたいことがたくさんあるが、本当に、そ

れは訊いてしまってもいいことなのだろうか……。

俺は考えごとをしながら、時々うつととうたた寝してしまった。しかし、何度も目を覚ます。隣を見やると、必ずミューシャは同じ格好で眠っている。これを俺は繰り返し返していた。

朝。俺はいい加減、中途半端な眠気を覚ますために立ち上がり、高く両腕を上げて背伸びをした。

「うっつ。……はぁっ」

……彼女はいつまで眠っているつもりなのだろうか。昨日と変わらず、同じ状態で眠っている。俺だって、休暇が明けてしまっから国に帰りたいのに。幸い、目の前にあるサリナ城下町に、アムタワ国への電車が出ている。……電車といっても、ただの電車ではないが。だがその前に、ミューシャと話ができるまで、帰れない。

第七話：そう、謳が聴こえてきたんだ……。

それにしても、綺麗だな。まつげが長い。真っ白な肌には、美しさを感じるが、どこかひ弱そうにも見える。第一、この細い腕。ちやんと、今まで十分に食事を摂ってきたのだろうか。これでは、倒れるのも当たり前だ。祭で舞を舞うくらいだから、スタイルにも気を配らなきゃいけないのだろうけど。長い金の髪もさらさらで、陽の光にあてられてつややかに光っている。……思わず撫でたくなる。いやいや、俺は何を言ってるんだ。

確かに、アムタワ国にはこんな美人は居なかった。リユーシャでさえも、これほどではなかった。……比較しちゃあいけないが。

時間を無駄にはいけないと思い、俺は構えをつくり、拳を突き出した。右、左、右、右……。連続で出す。時々蹴りを入れてみる。城の警備兵たる者、万が一のことを予測して動かなければならない。

例えば、武器が取られたとき。丸腰でも、相手にぶつかっていけるようにしなければならぬ。仲間は、仕込み刀などを装備しているが、俺は昔から獲物を扱うより素手で戦う体術の方が向いていた。

だから、これ。実際、幾度もこの拳で敵をのしてきた。しかし、親や親類から訊くところによると、祖先はある理由から、一時期木刀を使っていたらしい。祖先のことを訊くと、何故か毎度うやむやにされた。だから、それ以上のことは知らない。

ひとつだけ、確かなことが言える。それは、俺の祖先がミール・ストーンの所持者だったということだ。

太陽が真上に昇るまで、俺は素振りを続けた。疲れて、その場にどっと座り込む。後ろに両手をつけて、足を投げ出した。汗でTシャツがずぶ濡れになっていることに気づき、急いでそれを脱ぐ。半

裸になりながらも、鞆からタオルを取り出して、次から次へと出る汗を拭った。

すぐ傍に横たわる少女を見ると、すやすやと未だ眠っている。目覚めないことに不安を抱きながら、もう少し、眠らせてやることにした。

夜。昨夜のように、俺はうとうとしながら、ミューシャの横に居た。ぼーっとする頭で、ぼんやりとする視界で、彼女を見つめていた。

ふと、風向きが変わった。周りの空気が、ぴりぴりと張り詰める。俺は、すぐさま頭と眼を覚ました。・・・嫌でも覚める。そして、その場に立ち上がった。

辺りに気を配り、神経を集中させていると、木の葉がざわざわと騒ぎだし、人間の謳のようなものが聴こえてきた。

『永遠の謳のはじまりはじまり

我らは時を歩む呪いの子

チカラを得た選ばれし者

未来を選んだのは自分達

背くな 逃げるな

君の仲間は今此処に

さあ出かけよう

無限の時を歩む旅へ

無限を生きる虚しい旅へ』

第八話：初めて闘った。・・・彼女の為に。

『永遠の謳のはじまりはじまり

我らは時を歩む呪いの子

チカラを得た選ばれし者

未来を選んだのは自分達

背くな 逃げるな

君の仲間は今此処に

さあ出かけよう

無限の時を歩む旅へ

無限を生きる虚しい旅へ』

・・・謳らしきものが止んだ。すると、真つ黒の空から人が一人、降りてきた。真つ黒な空から、真つ白な衣服を纏った男が。宙に浮いていた足を地につけ、着陸した。俺は、無意識に警戒してしまう。いったい、どんなことをしたら、今のような芸当が出来るのだろうか。眼を疑いたくなつたが、これもまた、現実。自分で見た真実だ。俺も多少念力が使える。アムタワ国民の特徴だ。しかし、このような芸当は、アムタワ国では見たことがない。

空から舞い降りた男は、じいっと俺の顔を見つめる。俺は睨み返した。

「おまえ、なんな・・・」

「こんばんは。はじめまして。クラーヌと申します。以後、お見知りおきを」

俺と言葉が重なるが、構わず奴は続けた。にこにここと微笑みながら、ぺこりと頭を下げる。・・・紳士がするようなポーズで。それにしても、クラーヌ・・・どこかで聞いたことのある言葉だ・・・。

俺は構えを解かずに行った。

「おや？　こちらが名乗ったというのに、君は礼儀を知らないのかな？」

はつと我に返る。礼儀知らずと言われて少しカチンときたので、睨みつけた。

「キース・グレイルだ。二、三、訊きたいことがある・・・」

「僕のお願いを聞いてくれるなら、答えてあげてもいいよ」

「願ひ・・・？　こいつが、初対面のこいつが、俺に・・・？　全く理解が出来ない。あいつだって、俺のことは何も知らないはずだ。」

「・・・言つて、みろよ」

間違いだった。俺がこの言葉を放った矢先に、クラーヌは両口角を引き上げ、気味悪くにやりと笑った。その不可解な微笑みに、ぞくりと背筋に悪寒が走る。そして、クラーヌは口を開いた。

「おとなしく、後ろの女の子を僕に渡してくれないかな？」

「な・・・!？」

「説明してる暇は無いだよ。さあ、早く」

掌を上にして、右手を出してくる。物乞いをする仕草だ。後ろの女の子・・・ミューシャのことだ。こいつは、ミューシャのことを知っているのか？　どんどん疑問が浮かぶ。

「何をばーつとしてるんだい？　勝手に貰っちゃっていいのかな？」

「ま、待て!!　俺は、ミューシャに用があるんだ。そもそも、お前はミューシャを知っているのか？」

一歩近づいてきたところを、言葉で静止させた。クラーヌの顔は、ますます気味の悪い笑顔を作り出していく。

「ふふ・・・。彼女も僕のこととはまだ知らないよ。教えて欲しいかい？　彼女と僕は同類なのさ。力を得、大きな罪を犯した・・・ね」

「力・・・？　罪・・・？」

「お喋りはこれでお終い。時間が来ちゃった。彼女を快く譲つてくれないみたいだから、力づくで貰っていくことにするよ」

言葉が終わるが速いか、クラーヌの姿は俺の目の前から消えていた。

気づくと、俺の真後ろに立っていた。ぎくりとして、その場から一飛びで退いた。しかし、一瞬遅く、背中には痛みがはしる。拳で殴られたようだ。あんな弱そうな笑顔野郎のどこにこんな力があつたのか。俺が一步退いたのをいいことに、クラーヌはミューシャに近寄っていった。

「待てっ!!」

「・・・まだやるの？ キース君、僕のスピードについて来れてないじゃない」

凶星。眼で追うのが精一杯。軀は視覚に追いつかず、クラーヌの動きに反応できない。

その時。

「ん・・・。うあ・・・」

今まで寝返りも打たなかったミューシャが、声をあげた。夢にうなされているのだろうか。呻き声が彼女の口から漏れている。

クラーヌは、ふうと肩を落として、俺の方に向き直った。

「目が覚めそうだね。・・・まだ彼女に『あっち』への出入口を教えるわけにはいかないからなあ。・・・また来るとするよ。キース君、それまでもっと強くなつてね。ばいばーい」

ふ、と一瞬ミューシャに視点を落とし、そして俺に向かって笑った。笑ったかと思うと、クラーヌの足元が浮き、また暗闇に溶け込んでいった。最後まで、あいつの振っていた手が見えていた。

どすつと俺はその場に腰を下ろした。疲れた・・・。いつたい、あいつは何だったんだ・・・？

第九話：聴こえた謳。嫌な目覚め。

．．．．．声が．．．聴こえる．．．。これは、謳．．．？
だんだん、近づいてる．．．ような．．．。．．．あたしに向かっ
て、謳ってるの．．．？

『永遠の謳のはじまりはじまり

君の仲間はここに居るよ

世を恨み 時を歩む仲間が

人を恨み 無限を歩む仲間が

こちらへおいで

こちらへおいで

元には戻れません

過去には戻れません

傷は癒せません

気づいた時には、想った時には

もう、手遅れなんだよ』

どこかで聴いたこと、あるような．．．。．．．だめ、思い出せない

い．．．。手遅れ．．．？ いや、そんなの．．．。あたしは．．．

！！

ミューシャが目覚めた。俺が、足を投げ出して大きく深呼吸して
るときだった。

「い、やつ！！」

目覚めの第一声で、拒絶の言葉。俺は驚いて、すぐさま彼女に駆け
寄った。上半身を起こし、俺が掛けてやった服を両手でぎゅっと掴
んでいる。

「お、おい。大丈夫か・・・？」

俺の存在に気づかなかったのか、俺が声をかけるとびくつと軀を震わせた。そして俺を見上げる。息をほんの少し荒げていて、頭の中が混乱しているようだった。言葉が上手く、出てきていない。

「あな、たは・・・。あたし・・・」

「なかなか起きないから心配したんだ。気分はどうだ？」

俺の言葉に、何故か彼女は俯いた。そして、何かを思い出したかのように、勢いよく立ち上がった。

「どっ・・・どうした!？」

「あ、あたし行かなきゃ! 貴方とはいられない!!」

「落ち着けっ! 話を訊かせる!!」

俺は乱暴ながらも、無理矢理その場に座らせた。どうやら観念したようで、もう逃げようとはしなかった。まだ夜中で冷え込んでいたので、彼女の肩に、先程眠っているときに被せてあった自分の服を羽織らせた。

第十話：それぞれの決意。

俺は乱暴ながらも、無理矢理その場に座らせた。どうやら観念したようで、もう逃げようとはしなかった。まだ夜中で冷え込んでいたので、彼女の肩に、先程眠っているときに被せてあった自分の服を羽織らせた。

「ふう……。まず、俺の名はキースだ。キース・グレイル。あなたに、訊きたいことが山ほどある。答えてくれ」

ミューシャは、俯いたまま何も言わなかった。

「……。単刀直入に訊こう。……何故、リユクールを消滅した？」俺の言葉に、びくつと軀を震わせた。俺はそれを見逃さない。だが、彼女は喋ろうとはしなかった。

「なあ……。なんで、消滅したんだよ……。？」

俺が弱々しく問いかけると、ぼそりと声が聴こえた。

「……。い。皆……。嫌い……。っ！」

「きら……。い？」

俺は彼女の言葉を復唱して確かめる。そんな、理由で　！？　いや、まだ何かあるのかもしれない。じつと見つめていると、彼女は喋りだしてくれた。

「そうよ……。っ。皆、消滅えちやえば……。！！　あたしを、苦しませないで……。っ！！」

「くる……。し、む？」

上手く言葉が出てこない。彼女の身に、何があったのだろうか。いつの間にか、ミューシャは両手で顔を覆い、泣き伏せていた。俺は驚き、わたわたと慌てながら、とりあえず彼女の背中を摩つてやった。

「悪い……。えっと……。嫌なこと、訊いたな……」

肩を震わせ、返ってこない返事を待っていた。期待はしていなかったが。

夜も明け、太陽が顔を出し始めた。鳥たちが「おはよう」と言うかのように、一斉に空へと羽ばたく。

「なあ……。クラー又つて男、知ってるか？」

泣き止んだものの、未だ俯き俺の顔を見ようとしなないミューシャに、唐突に訊いてみた。

先程、空から現れた、あの不思議な男のことを。

しかし、ミューシャは俯いたまま、ふるふると首を横に振るだけだった。「そうか」とだけ、俺は言う。結局、アイツは何者なんだろうか。何故、ミューシャを連れ去ろうとしたのだろうか。

俺はもう一つ尋ねてみる。

「お前、これからどうするつもりなんだ？」

暫く答えが返ってこなかった。

「……何も、ない。目的は果たしたもので……」

返ってきた返答は、実に寂しいものだった。この時、俺は彼女を護りたいと思った。目の前に居る少女を。どこかに闇を潜めているこの少女を。あの得体の知れないクラー又とかいう男から。組織で動いているかもしれない、あの者から。

「……じゃあ、俺の国に来いよ。面倒見てやる」

俺の言葉に、ミューシャは驚いたようだった。垂れていた頭を、急に上げて俺を見据えた。

「あ、何も変なことは考えてないぜ。その……」

本当の理由を、言えなかった。言いくかった。この娘ひとりでは、あの男に太刀打ち出来ないの是一目瞭然だ。……俺でさえ適わなかったんだから。それよりも、この娘はクラー又側へ行ってはいけない気がした。

「まあ、とにかく来いよ。な？」

理由を紛らわせて、俺は強引にミューシャの腕を引っ張った。彼女は我に返ったのか、びくつと軀を震わせた。

「・・・駄目っ！ 一緒に、居られない！ あたしと居ると、あなたが危ないの！！」

必死に腕を振り払おうとするが、俺の握力には適わず、結局俺が腕の拘束を解いてやった。息を弾ませながら、また泣き出しそうな表情をしていた。

第十一話：不安。そして、心の奥底の、希望。

（前書き）

更新遅くなりました。
待っててくださった方、ごめんなさい！

第十一話：不安。そして、心の奥底の、希望。

「俺が、危ない？　なんでだよ？」

「……」

話したくないのか、彼女は口をまた噤んでしまった。俺は肩で溜め息をつき、話すことにした。

「お前さ、俺と一緒に居るか、何されるか分からない変なヤツのここに行きたいか、どっちだ？」

俺の変てこな質問に、彼女は首を傾かせた。何を言ってるんだろう、みたいな感じだ。俺は返答に困っているミューシャを見て、くすくすと笑ってしまった。

「……嫌だろ？　そんなヤツらから、俺が護ってやるって言ってるんだ」

これは嘘ではない。現に、クラーヌがミューシャを攫おうとした。

そして、また来ると言っていた。

「なん、で？　なんで、護ってくれるの……？」

「なんでって……だから、女の子の一人歩きは危ないだろ？」

クラーヌが来たから、なんて言えない。いつか知ることはなると思うが、知らない方が幸せだ。今はまだいい。口から出任せを言うておくことにした。

「あたしと一緒に居たら、危ないんだよ……？」

「だから、なんで危ないんだよ？」

会話が振り出しに戻ってしまった。また彼女は口を噤む。すると、先程とは違い、すぐに言葉を発した。

「……あたし、リユクールを消滅したんだよ……？　恐くないの……？」

ああ、そういうことか。そんなの、何かわけがあったって分かった

今となつては、別に恐怖は微塵にも感じやしない。

「別に恐かねえよ？」

「……っ。違つっ。この、膨大なチカラが、いつかまた、爆発しちゃうかもしれないんだよ！」

初耳だ。だからクラー又は、仲間を引き入れようとしていたのか。

しかし、彼女には驚いた振りさえ見せないようにした。

「じゃあ、その時は俺が止めてやるよ。な？」

軽く笑つて誤魔化してやった。彼女はまだ納得できない様子。ふう、とまた俺は溜め息をついた。

「俺が、止めてやる。お前だつてもう、消滅すのとか嫌なんだろう？」

だったら、俺が傍にいて、止めてやる。お前のその変なチカラから、お前を護つてやる」

ちよつと真剣な表情で言つてみた。すると、ミューシャはやつと納得したようで、目を合わせないようにそっぽを向いたまま、小声で

「お願いします」と言った。聞き逃さなかつた俺は、にっこりと笑つて、彼女の頭をぼんぼんと軽く撫でてやった。

「改めて自己紹介するよ。キース・グレイルだ。キース、でいい」

第十一話：不安。そして、心の奥底の、希望。

（後書き）

100Hitを超えました。有難うございます。

第十二話・笑顔が、陽だまりのようでした。

(前書き)

更新遅くなりました。

第十二話：笑顔が、陽だまりのようでした。

「キー……」

途中でやめてしまった。どうも呼ぶ気にはなれなかった。……だつて姉さんの知り合いなもの。あたしが知らない、姉さんの交友。あたしを放っておいて、仲良くしてた人。

「何だよ。呼んでくれると思ったのに、名前」

彼はにつこりと笑った。いや、苦笑かしら。反射的に顔を反らしてしまう。吐き気がするような自分の過去。その思いが蘇るよう、眼を直視出来なかった。

あたしが色々思いを巡らせているうちに、彼はその場に立ち、伸びをしていた。

「さーつと。夜も明けたし。行くか」

ひとりごちたように言葉を紡ぐと、彼はまだ座っているあたしに手を差し出してきた。あたしはその手のひらの意味をすぐには理解できず、じいつと手のひらを見つめていた。いつまでたっても行動を起こさないあたしに、彼は肩をすくめたようだった。

「なに？ 立てないの？ ほら、行くぞ」

ぼーっとしていたあたしの肩を軽く揺らし、声をかけた。差し伸べられていた手はいつの間にか引つ込められていて。でも、絶えない笑顔があたしに手を差し伸べているようだった。

結局、ひとりで立ちあがったあたし。彼は、あたしが立ち上がるのと、拍子で落ちた自分のジャケットを拾い、羽織った。

「よし、まずはサリナ国の城下町行くぞ。そこからしか、俺の国への列車が出ていない」

羽織り終わると、彼はあたしを見て最初の目的地を示した。サリナ城下町からのみ、出ている列車と云ったら、空中浮遊国の、アムタ

ワ国だろうか。

一昔前までは一切交流のなかった国だ。しかし、ミール・ストーン
の革命があつてから、交流が出来てきたとか。今では、近隣国へ行
く普通の列車はもちろん、アムタワ国へ行く浮遊する列車も開発さ
れた。特殊な能力を持つ、アムタワ国民の支援を受けてだが。また、
動かすのが困難な列車なので、料金が高いのは当たり前、切符を手
に入れることでさえ難しい。だから、サリナ国だけにしかなくて、
普通の人も新婚旅行とか、特別な中の特別な日でしか行かないのだ。
「どうした？ 気分でも悪いのか？」

答える代わりに、あたしは首を横に振った。それを見て彼は、ふ、
と口元を緩め、「よし」とだけ言った。

なんで、この人は見ず知らずのあたしに、危険なチカラを持つあ
たしに、こんな優しくしてくれるのだろう。まだこのチカラを持た
なかつた時でさえ、リユケールの皆はあたしから離れていったのに。
姉さんでさえも。．．．何か、隠してるような気がする。キー．．．
この男は、何かをあたしに隠してる。絶対。

第十二話：笑顔が、陽だまりのようでした。

（後書き）

私の初作品である、小説<ミール・ストーン>。
順調に2600Hitを記録しております。
そちらの方も、是非読んでみて下さい

第十三話：～回想～楽しかったあの頃は。

（前書き）

ミューシャの回想です。
小さい頃に戻ります。

第十三話：～回想～楽しかったあの頃は。

あれはあたしが六歳の時のこと。姉さんは十歳で、まだパパとママが生きていた頃。家族みんな仲良しで、姉さんもあたしを可愛がってくれた。でも、ある日突然事件は起きた。

その日は、雪降る季節の終わりがけで、暖かい時期から蓄えていた野菜が底を尽きかけてしまっていた。姉さんは学校があったので、仕事が休みだったパパとママとあたしの三人で、近くの森までその時期でも採れる山菜を摘みに行った。

お弁当を四人分作って、鞆に必要なものを詰めて、ママは姉さんに家の鍵を渡して。そして四人一緒に家を出た。出るときも、ママは姉さんに

『気をつけてね。もし早く帰っても、鍵はちゃんと閉めておくのよ』

って髪を梳きながら笑顔で言っていた。パパも

『知らない人についてつちや駄目だぞ』

って。姉さんは

『大丈夫よ、心配性なんだから』

ってパパの冗談めいた心配を笑顔で返してた。最後にあたしに

『ミュージシャ、いい子でね。森は危ないから、気をつけるんだよ』

って頭を撫でながら言ってくれた。

今思えば、あたしに向けてくれた姉さんの笑顔は、あの日が最後だった。

互いに手を振りながら、あたしたちは都の門、出入口へ。姉さんは学校の方面へ。後ろを幾度となく振り返りながら、姉さんに手を振った。・・・姉さんも手を振ってくれた。

都を出ると、すぐ左側に森がある。都を出てそんなに時間が経たないところで、森へ着いた。

森の入り口でパパは鞆の中から、採った山菜を入れる袋を出した。ママとあたしはそれを見ていた。準備が出来る、三人で中へ踏み込んでいった。つい先日雪が降ったせいで土はぬかるんでいたけれど、山菜取りには影響しない程度だった。

「どんどん奥へ進んでいくと、寒い時期でも生えるキノコや菜っ葉を見つけてることが出来た。それを小さいものは残し、ちょうどいくらいにまで育ったものをパパの袋に入れていく。」

「パパ、重い？」

とあたしが訊くと、

「いや、まだミューシャの方が重いな」

と笑顔で答えてくれた。まだこの時、あたしたちには何が起ころかわからなかった。・・・まだ、幸せだった。

突然、あたしたち三人の物音ではない、ガサツという音が背後で聞こえた。

「あれ、今のママか？」

と、パパがママに物音の犯人を尋ねる。ママは、違う、と首を横に振っていた。

・・・そして、あたしは見てしまった。大きな大きな、獣を。

第十四話：～回想～突然襲った悲劇とは。

（前書き）

前話から今話にかけて、ミューシャの幼いときの話を展開していきます。

第十四話：～回想～突然襲った悲劇とは。

普段、あの森に獣など居なかった。ましてや、あの寒い時期では冬眠しているだろう。今でも一番不思議に思っていること。それは、あの獣は、自分の国でも近隣国でも凶鑑でも、見たことのない獣だったということだ。

あたしは獣を指差して顔を引きつらせた。

『あ・・・あ・・・』

と泣きそうになっているあたしを見て、パパとママはやっと背後を振り返り、ぐるるるる・・・と唸っている獣に気がついた。見た瞬間から、パパとママも顔を強張らせて、がたがたと震えていた。ママはあたしの手を取り、

『に、逃げましょう！』

とパパに言っ—一目散に走った。パパも走る。あたしも手を引かれて走る。

しかし獣も当然追ってきて、まずパパを襲った。

『あなたーっ！！』

ママがそれを見て叫んだけど、獣にのしかかれたパパは逃げられぬことを悟ったのか、

『逃げる！』

とだけ最期に叫んだ。すぐに獣に頭を踏みつけられ、ぶしゅつと周りの木に赤黒い血が飛び散った。瞬間、眼を閉じてその場面を見ないようにした。そしてすぐまたママがあたしを連れて走り出す。

幼いあたしにはわからなかったが、迂回しながら山菜を採っていたのだろう、森の入り口まで来た。助かった・・・。そうあたしは思ったが、後ろから追ってきていた先程の獣が、今度はママに激突してきた。ママに覆い被さったおかげで、あたしもバランスを崩し、

その場に転ぶ。獣は鋭い目であたしを睨んできた。

『ママ、ママ……!』

ママの手をぎゅっと握りしめ、声をかけるが、すでに返事はなかった。あたしは冷たくなってゆくママの体と、獣に恐怖して、すぐさま立ち上がり逃げ出した。目の前が入り口で、すぐに森から出る事が出来たので、獣はあたしを追っては来なかった。

必死に走って、都の出入口の門番に泣きながら訴えた。

『パパと……ひつく、ひつ……ママが……っ』

小さな都なので、都中顔見知り。なので門番はあたしを見てすぐに何があったのかと心配してくれた。

『どうした、何があった、ミューシャちゃん?』

大声で泣き出すあたしの頭を撫でて、落ち着かせようとしていたが、あの時のあたしには無駄だった。……あんなグロテスクな場面を見てしまったんだもの。

『もり……で、おつきな、……う、どーぶつさんがあ……!』

そこまで言って、二人の門番は行動に移してくれた。一人は門の中の警備本部へ、あたしを連れて行き、援軍を無線で呼んだ後、そこに居た女の警備兵にあたしを預けた。その後多分戻ってさっきの門番と一緒に森へ行ったのだろう。女の警備兵は、パパとママの返り血で赤く染まっていたあたしを見て、びっくりしていた。すぐに姉さんの学校へ電話した。

先に着いたのは姉さんだった。息を切らせて、持ってた鞆も何も手ぶらで、必死に走ってきた様子だった。

第十五話：～回想～悲劇は続くものである。

(前書き)

まだ回想が続きました。

第十五話：～回想～悲劇は続くものである。

『おねえちやあん・・・っ。パ、パパと、ママがあ・・・』

姉さんは、泣いているあたしをぎゅっと抱きしめてくれた。

『どうしたの、ミューシャ!? 何があつたの!?』

姉さんがそうあたしに問いかけたその時、先程の門番が帰ってきて、警備本部のドアを思い切り開けた。

『門番さん・・・。パパと、ママは!? 何があつたんですか!?』

姉さんはあたしから軀を離し、門番に詰め寄った。詰め寄られた門番は、顔をしかめ、言いづらそうに話し始めた。

『リューシャちゃん・・・。いいかい、よく聞くんだよ・・・。パパとママは、亡くなった。今、見に行つた警備兵の一人が、都長に報告してる・・・。これからのことがあるから、まず、都長のところへ行きなさい・・・』

『都長さんじゃない!! あたしはパパとママのことを訊いてるの!! なんて、なんで死んじゃつたのさ!?!』

再度、姉さんは警備兵に詰め寄つたが、都長の秘書があたしたちを迎えにきて、すぐさま都長のところに連れられてしまった。

車の中でもあたしは泣き続け、姉さんは呆然としているようだった。・・・もう、抱きしめてはくれなかった。

都長の部屋に案内された。都長が表情を曇らせて座っている、目の前の机には、血塗れの布と、何か細長いものが置かれていた。

『おお・・・来たか。リューシャ、ミューシャ。よく聞くんじゃ。』

君たちの父親と母親は、獣に襲われて、お亡くなりになった・・・。入ってきたあたしたちに気づいて、都長がその場に立ち上がり、曇らせたままの表情で言った。そしてまた、姉さんは詰め寄る。

『・・・なんで!! あの子には、獣は居ないはずだよ!?!』

『確かに。今、警備兵で捜査中、そして獣を追跡・退治中じゃ』

姉さんは、その場にへたり込み、嗚咽を漏らしながら泣き出した。

『そんな・・・！ だって、ついさっきまで笑ってたんだよ？ 信じられるわけじゃない・・・！』

『しかし、現実じゃ・・・ほれ、気味の悪いものと化してしまっただが、遺留品じゃ。多分服だろう。引き裂かれてしまったようじゃがな。それと・・・獣には喰われなかった、指じゃ』

机の上に置いてある細長いものは、パパとママの指だった。それを見て、姉さんは机に縋るように見上げる。そして、次の言葉。

『・・・あなたの所為よ！！』

『・・・？ おねえちゃん・・・？』

泣き止んでいないあたしを指差して、恨むような、憎むような眼で睨んでいた。あたしは無意識にぶるつと身震いをしてしまった。

『あんたがいたから！ あんたが足手まといになったから！！ だから、パパたちは逃げられなかったのよ！！・・・あんたさえいなければ・・・！ うっ・・・パパあ・・・ママー！！』

姉さんは絶叫した。部屋中に響き渡る。そして、数分も経たないうちに、部屋から出て行ってしまった。

『おねえちゃん！』

あたしは追いかけた。しかし、四つも年上の姉に追いつくはずもなく。途方に暮れて、最終的には家に帰ってきてしまった。

すると、玄関の鍵が開いている。・・・閉めたはずなのに。中に入ると、奥から嗚咽が聞こえてきた。

『おねえちゃん・・・？』

先へ進んでいくと、キッチンのテーブルで、姉さんは伏せて泣いていた。そして、あたしが近くへ来たことがわかると、

『来ないですよ！ この家に、あなたの居場所なんかはない！！ 出でて！！』

この日からあたしたち姉妹は決裂した。ほんの、数カ月後までは、

まだあたしは姉さんを慕っていた。ご飯を作っても『あんたの作った物なんか食べたくない!』とか、掃除すると『パパのカップに触らないでよ!』などと言つて、あたしをことごとく軽蔑した。仕舞いには、自分の友人にまで、あたしのことを妹とは思っていないだとか言う。あたしの友人も、近所の人たちも、リユクルの民はみんな、あたしを軽蔑するようになった。

あたしは独りになった。

そして、今まで堪えてきたが、この間限界に達した。ついにあたしはチカラを手に入れ、リユクルを滅ぼしてしまった。

第十六話：戻った現実。あつたかい。

「・・・おい。大丈夫か？」

突然かけられた声に、どきりとして声の主の方へ目を向ける。心配そうな顔をしていた。

「ぼーっとしてたけど？ どっか悪いのか？ あと・・・」

言葉を突然止めてしまう。何て言ったらいいのかわからない、というような表情をした。ふ、とあたしは目尻が熱いことに気づいた。

「あ・・・」

頬まで伝う一筋の涙。触れてみて、何故か不思議に思った。過去を思い出していて、流れたのだろうか。既に忘れ去られたものだと思っ
い込んでいたのに。今まで思い出しても流れなかったのに。なんで
・・・。

「大丈夫か？ ミューシャ？」

もう一度、相手を気遣うようにかけられた言葉。それには優しさがかもっていて、あたしが触れてもいいものではないような、温かさを感じられた。

「なん、でも・・・ない」

眼をこしこしと擦って、涙を拭いた。

「・・・何があつた？」

「へ・・・？」

急な質問に、素っ頓狂な声をあげてしまった。擦っていた眼を、彼の方に向ける。何か心配そうに、悲しそうな表情をして、見ているこちらが痛々しかった。

「だ、だから、何も・・・」

戸惑いがちに口を開いたので、声が妙に上擦ってしまった。彼はまだ、あの表情をやめない。

「・・・何かあつたらいつでも言えよ？」

そう言うと、彼はまた一步あたしの先を歩き出した。振り返らずに、ずっと歩く。

夕刻になり、日が沈もうとしていた。あたしたちは手近な雑木の下で夕飯を摂った。とはいっても、あたしは何も食料を持っていないので、彼から分けてもらったのだが。

沈黙した空気の中、夕食を終えると、彼はあたしにジャケットを貸してくれた。

「夜は冷えるから、これ被って寝ろ」

別に大丈夫、と服を返そうとするが、二枚重ねのTシャツにジーパンの彼と、ノースリーブのワンピースを着たあたし。夜中、どちらが寒いかと問われると一目瞭然だ。それ以前に、確かにこの格好では涼しかったので、彼の言葉に甘えることにした。

第十七話・悪の紳士、空より登場・・・。

(前書き)

新年、明けましておめでとございます。

第十七話：悪の紳士、空より登場・・・。

夜中近く、木に凭れかかってうとうととしていた頃。
急に、ざわざわと木々が揺らめいた。風が吹いて、辺りが騒がしくなる。

あたしは薄目を開けて、視える範囲で視界をまどろわせてみた。
ふと、紺の空を見上げる。・・・驚くことに、空が割れていた。

「な、に・・・？ あれ・・・」
思わず眼を見開き、声が出る。あたしが凭れていた木の裏側で眠っているあの男は、まだ眠り続けているようだ。

割れたところから、一人、人間らしきものが出てきた。それはすぐにあたしに気づき、此方へ向かってくる。

「おや？ 今晩はミューシャの方が起きてたんだね。失敗失敗」
からからと一人で笑いながら、あたしの目の前にまで来た。当然、座ったままのあたしは近づいてきたこの男を見上げる形になる。すると、この男はあたしに手を差し出してきた。

「さ。迎えに来たよ。邪魔者が来ないうちに、僕らの城へ行こう」
彼はにつこりと微笑んだ。しかし、見知らぬ初対面の人間に、可笑しな誘いを受け、困らぬはずがない。あたしが困惑した表情を彼に見せると、また穏やかに笑う。

「あ、自己紹介がまだだったね。女性に失礼をしてしまったな。僕はクラーヌ。さあ、ミューシャ。僕と共にみんなのもとへ行こう」
彼は名乗ると、半ば強引にあたしの腕を引っ張り、無理矢理立たせた。

「やつ・・・！ なに、するのよ・・・っ！」
「君は、チカラを手に入れたらどう？ そんな危険なチカラを持つた者が、普通の人間と一緒に居てはいけないよ。さあ。同胞の待つ

場所へ急ごう。痛い目見るのは嫌だろう？」

微笑んだ笑顔が、この時ばかりは冷たかった。恐くて、ぶるつと震えてしまった。

「変な勧誘するな、クラーヌ」

あたしの腕を掴む男の腕を、また別の者が掴んだ。・・・キース、だ・・・。

「あれ、起きたの、キース君。カづくは嫌いなんだけどなあ」

「こつやって腕掴んでる自体で、もうカづくじゃねえか」

俺はクラーヌをぎっ、と睨んだ。

「僕に、チカラで敵うのかな、キース君？」

俺とクラーヌとのやり取りの最中、ミューシャはずっと、一点を見つめたまま、ぼうつとしていた。

「ミューシャ。おい。大丈夫か？・・・おい！」

俺はどこか状態のおかしいミューシャの肩を揺らした。しかし、何の反応も見せない。

「無駄だよ。今頃ミューシャは、我が主の謳う謳を聴いているんだろっね」

「謳・・・？」

第十八話：ちらり視えた、本音の後悔。

・・・また、謳が聴こえる・・・。あたしに、語りかけてる、よ
うな・・・。

『永遠の謳のはじまりはじまり

いつまで君は待たせるんだ

僕らは君を待っている

こちらへおいで

さあ仲間に

向こうに君の居場所は無いんだよ

君と歩いてくれる者は居ないんだよ

さあ僕らと共に

こちらへおいで』

だれ・・・？ いったい、あなたは、だれなの・・・？

嫌だよ・・・。あたし、本当は、こんなチカラ、いらないんだ・・・

！

リユクール、滅ぼしちゃった・・・。消滅^きえちゃった・・・。

独りに、なりなくなんか、な・・・い・・・よう・・・

どさり、と急にミューシャの軀の力が抜ける。

「ミューシャっ!？」

「ありやー。また失敗。この娘の心はなかなか強いんだねえ」

俺が彼女の軀を支え、ぎゅっと抱きしめると、それを見たクラー又
がけられらと笑い出した。俺はミューシャを抱き上げたまま、睨み
つける。

「じゃあね。また迎えに来るよ。僕らは彼女を仲間にするために、
どんな手でも使うから。肝に銘じておいてね。じゃまた、ね」

そう言い残し、クラー又は手を振って空の割れ目へと消えてゆく。
割れ目さえも消えると、待っていたかのように、一気に月が沈み、

陽が昇った。

「朝・・・?」

俺はミューシャを木の根元に下ろした。横に寝かせて、俺の服をかけてやる。

「あいつ・・・。なんで、ミューシャを仲間にしようとしてるんだ・・・?」

第十九話：ごめんなさい。違っの、本当は・・・！

よくも、よくも私をこの世界から消滅けしてくれたわね・・・！
姉さんが、あたしを指差して、憎らしげに叫んでいる・・・。

その上、キースまで私から盗ろっつていうの！？

『違っよ！ あたし、リユクールが消滅きえるのを望んだわけじゃないの！』

あたしも負けずと叫ぶけど、それは姉さんには届いてないようだ。

怨んでやる、憎んでやる！ 一生ね・・・！！

『いやっ！ 違っの、姉さん！！ だからあたしは・・・！ このチカラなんて、本当は要らなかつたの・・・！』

ミュージヤが目覚めるまで暇な俺は、近くを散歩してこようと思つた。だが、立ち上がった途端、凭れていた木の後ろからミュージヤの小さな悲鳴が聴こえた。

「や・・・！ あたし、ちが・・・っ」

俺は何事かと、すぐさま彼女の様子を見るため、木の裏側を覗いた。「どうした!？」

しかし、頭の中が混乱しているのか、俺の方に眼を向けることなく頭を抱えて俯いている。がたがたと震えていて、その震えを止めてやりたい、なんて思った俺は、彼女を胸の中でぎゅっとなぎしめた。びくつと反応はするものの、拒否さえ出来ないような様子。

「やだ、やだよ・・・！ ね、さんが・・・あたし、違っのにつうわ言のような、誰かに訴えているような・・・そんなことをずっと繰り返していた。俺は、そんな彼女に「落ち着け」としか言えなかった。

「チカラ・・・いらないつ・・・！ 消滅きえないでえ・・・。ほんとは、ちが、のお・・・」

彼女のぽつり、ぽつりと発する言葉に、何か違和感を感じる。“消滅^きえないで”とはどういうことだろうか？ 自分の意志で、リユクールを消滅^けしたのではなかったのだろうか？ わけがわからなくなってきた俺は、彼女を抱きしめながら、頭を撫でてやった。

「やだよお……。も、ひ、独りにしな、でえ……。！ ひとりぼつちはも……。やだよう……。」

暫くすると、ミューシャは命綱が何かを掴むように、俺の服をぎゅつ……。と握り締めてきた。おまけに号泣している。女の子が泣いている、ましてやこんな号泣するような場面に、今まで生きてきて一度も経験したことがない俺は、内心どうすればよいのか戸惑っていた。俺が黙ってこいつの言うことに耳を傾けていると、もう一つ、興味深い言葉が。

「消滅^けす、つもり……。なかつ……。」

“消滅^けすつもりなかつた”？ さっきの“消滅^きえないで”と一緒に考えると、本当にこいつが自分で望んでチカラを手に入れたのではない、ということを想像できる。……。じゃあ何故？ 何故、リユクールは消滅^けしたんだ……。！？ クラーヌの正体や、ミューシャを仲間にしようとしている目的が気になる。謎だらけだ。

第二十話：今はもう、自分しか持ちえない、過去。

暫くして、ミューシャの号泣が収まり、落ち着いてきた。もう一度俺は

「大丈夫か？」

と訊ねる。まだ俺は彼女を抱きしめていて、彼女の額は俺の胸につきりと着けられていて。だから彼女の表情は視れなかった。まあ、視てはいけないものなのかもしれないが。

俺の問いに、彼女からは何の返答もなく、ただまだ肩を軽く震わせているだけだった。俺は引き続き、彼女の震えが収まるまで髪を撫で続けた。まるで、赤子をあやすかのように。

また暫くたった後、ミューシャの震えは完全に止まった。そして、俺はふと気づく。それを確かめるために、俺は声をかけた。

「・・・ミューシャ・・・？」

返答はない。ある程度の予測をして、俺はそうっと抱きしめていた腕の力を緩め、彼女の顔を伺った。

・・・眠っている。眉間に微かな皺を寄せ、まだ目尻と頬には渴ききつていない涙があった。いや、現在進行形で流れているのかもしれない。彼女の表情は、心地良さげではなく、悪夢を見ているような、どこか怯えた表情だった。

予測が内心、見事的中した俺は、そのままゆっくりと彼女の軀を横に寝かせ、地面に降ろした。

『うう・・・。パパ、ママ・・・っ』

姉さんが、パパとママの写真の前で泣いている。顔を両手で覆って泣き続けている。

この日は多分、パパとママの命日だった気がする。

命日や、それが近い日は、特に厳しくあたられた覚えがある・・・。確か、この日も・・・。

『なんで……。私を置いて逝かないでよ……。』
ブルルルルル……。』

その時、電話がなつたんだ。姉さんは気づいてない様子だった。まあ当然、姉さんは出られるような状態じゃなかった。だから、いつもなら許可されてない電話を、あたしが取つたんだ。

『もしもし……。』

『もしもし。あれ、リユーシャじゃねえな。ブスの妹の方か？』

かなり口の悪い人だった。そして、この電話先の相手はあたしを知っていて、あたしはこの人を知らない。……。姉さんがあたしのことと、悪く言いふらしてるんだろうなって、そんなことをふと考えていた。

『おい！ さつさとかわれよ、ノロマ！ 第一、電話に出ること禁止されてるんだろ？』

『……。少々お待ち下さい』

なんで、この人はあたしに禁止されてることまで知ってるんだろ。

『姉さん、男の人から、電話……。』

あたしは受話器を姉さんの方に向けて。そしたら、姉さんはぱっと顔色を変えて、

『勝手に電話に出るなって言ったでしょ！？ この家の物に、あんなには触る資格なんて無いっ！ いっそこの家から、この都から出てっ！』

そう言つて、電話の近くにあつた掃除用の叩きで思いっきり殴られた……。』

そして、姉さんは普通に電話に出る。

あたしは殴られた腕を摩りながら、姉さんが電話してる隙に位牌がある、姉さんが先程

まで泣き伏せていた写真の前まで行つて、写真の前で手を合わせた。……。これもまた、姉

さんに禁じられていること。数瞬、あたしは眼を瞑り、黙祷した。

そして次の瞬間には眼を開け、手を離す。すぐさまその場から立

ち去り、自分の部屋に
籠った。

そしてまたそこで、あたしは泣いていた気がする。

『どして・・・？　なんで、こんな目に合わなきゃいけないんだろ・・・？　パパ、ママ・・・。ほんとは、姉さんとあたし、助け合っ
ていかなきゃいけないんだよねえ・・・？　それとも、あたしが間
違ってる・・・？　パパとママも、あたしを・・・恨んでるのかな
あ・・・？』

第二十一話：どうして。あなたはそんなに優しくするの？

あたしは、眼を覚ました。ゆっくりと開け、この眼に映った景色は、太陽が完全に真上に昇り切った、眩しい景色だった。

「起きた？」

ふと、かけられた声。声の主の方へ、あたしは視線を向けてみる。誰のものなのかは分かっていたけれど。

その声の主は、あたしを見てどこか哀しそうな顔をしていた。心配してるのかな、と思っただけではない哀しい表情。

「大丈夫？」

もう一声。あたしは小さく、うん、と頷いた。彼は「そっか」とだけ言い、それでもまだ、あの表情は崩さないで。

「歩ける？」

短く問いかける。あたしもまた同じように頷いて、ゆっくり軀を起こした。

そういえばここ何日か、あたしがずっと眠ったままだったから、一歩も前に進んでいな

い。それよりもまず、あたしはこの男に甘えていてもいいのだろうか。

あたしと居れば、必ず何らかのことに巻き込まれる。それが何なのかは、あたしもわからないけれど。たとえ彼が姉さんの友人だとしても、巻き込みたくないのはあたしの本望。

これ以上誰も、あたし以外傷つけちゃいけない。でも彼は、それを踏まえて、あたしの傍

に居てくれると言った。あたしはどうすればいいのだろう。

何の会話もないまま、歩き続けること数十分。サリナ国城下町に到着した。

彼はすぐに列車の手続きをしに、駅へ行った。

「こつち。ちゃんと着いてこいよ」

釘刺すように、ちゃんとあたしに言葉をかける。あたしもそれに従う。

彼が係の者と話し終えると、そのまま後ろの方で待っていたあたしに近寄ってきた。

「三日後に、アムタワへ出発だつてさ。宿取つて、のんびり観光でもするか・・・」

頭を掻きながら、彼は言った。そして、ずっと彼の顔を見つめていたあたしの視線に気づいたのか、彼は微笑んだ。

「どっか、行きたいとことかある？」

かけられた急な言葉に、あたしは少し驚いたが、ふるふると横に頭を振ると、「そっか」とだけ言つて、彼は歩き出した。

第二十二話：キミを知りたいのに。

とりあえず、宿に向かって歩いた。

（『どこも』・・・か。ホント・・・何に対しても興味がないって
いうか・・・）

頭の後ろで両手を組みながら、時々一歩後ろを歩くアイツを見やっ
て歩く。俯きながら歩いているアイツは・・・その長い金髪とそれ
以外纏っていない真っ白のワンピースとで、通りすぎる町の奴らか
ら視線を浴びていた。

その視線が痛いのか、時々顔をしかめる。

俺はそんなアイツが見てられなくて、自分でも思っていない行動
に出してしまった。

気づいたら、俺はアイツの手を握って、早歩きで見つけた宿に入
っていた。

アイツは眼を丸くして俺を見ていた。はっと我に返った俺は、悪
い、とだけ言って手を離し、すたすたと受付へ行ってチエックイン
した。

「申し訳ございません。ただ今一部屋しか空いております」

なんて不運なんだ。よりによって部屋が空いてないなんて。だが
仕方ないか。この時期は承認の出入りが激しいし、アムタワ国へ3
日後に出るとなれば、な。

「その部屋、ソファアか何かあんの？」

「どうぞいます。シャワーとお手洗い、それから冷蔵庫完備で夜景も
素敵なB級の・・・」

「じゃ、そこでいいや」

つらつらと並べる受付のボーイの言葉を遮り、ルームキーをもらっ
て部屋へ向かった。

「はー・・・。つつかれたー・・・」

部屋に入るなり、ソファーにどかっとな腰を下ろす。さすがB級の部屋。なんとも柔らかいソファーだこと。

そんなふうにくつろぐ俺を見て、ミューシャはなにか固まっている。頬を少しだけ赤く染めて、やっと開いた口からは、訳の分からない言葉が出てくる。

「あ、あの、やっぱりあたし、いい・・・っ」

「は？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0267b/>

終わりのないうた

2010年12月29日02時13分発行